

和歌[数首] : 文苑

著者	下山, 陸治, 湊川生, 勝部, 義文
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 9
ページ	5 7 - 5 8
発行年	1894-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/4443

知堪別地離陽亦長小村州

漠々海雲雜晚烟。愛看奇景落吟邊。後峯雨
是前巒雪。十里平分寒暖天。

海客宴開意氣豪。拈拳如湧響波濤。夜深人
定萬船寂。三十六灣寒月高。

攘夷頑說與煙銷。男子腰間亦廢刀。却見太
平兵備足。森嚴砲壘壓波濤。

港北大黑街有
陸軍砲城

旅恨頻生眠未成。更深漁唱寂無聲。港中數
日風波惡。一夜鳬鷗近枕鳴。

昨凌風浪再乘舟。志有所期未易酬。一穗殘
燈孤枕冷。夢魂一夜落松洲。

往還刻日出京城。倏忽天涯月亦更。半夜夢
醒聞雁語。一燈殘影照鄉情。

苦熱

秋月 胤繼

早雲飛火聳晴空。矮屋煩襟恰如烘。安得沛
然雷雨作。清涼不用扇頭風。

眞然々々

文苑

潑墨雲頭橫。半空奇峯頽落畫欄東。迅雷一
擊雨懸瀑。洗盡煩炎頃刻中。

一服涼清散

納涼

蒸人午熱夜依然。吟杖尋涼到水邊。風露蕭
蕭秋滿地。中流月氣白如烟。

好絕句一唱三歎

夏日山居

摩天青嶂隔人寰。幽絕何妨晝閉關。尤喜書
窓眠一覺。瀑聲洗熱水潺潺。

笠間益三拜讀

夏曉

下山 陸治

ひろのまのあつさもあけに有明の

月影すゝし夏のあけかた

扇

手にあれし扇の風のあろりせは

夏のあつさをいかて過さん

村居

千町田の片山里に家居せば

いさ葉みるさへ涼しうりけり

立秋

夢のまゝ年もあかはに過はてゝ

風の身よまむ秋とはかりにき

日清の戦をきゝて

吹拂ふ御旗の風にまひくちん

唐土原のしこのやち草

むかしより大和の國の人々は

半鬼どりひしくものと知らすや

立秋懷遠征

れもいやる韓國山はいろならん

今朝我宿に秋風のふく

をりにふれて

溪川生

母やいかに父やいろにと木枯の

吹く夜は分けてこひをふるうな

風知秋

勝部義文

音にこゝまた吹き分かねあかつきの

袖にまらるゝ秋のはつ風

折にふれて

何くれと昨日にかはる世の中を

思へは袖の涙ろはかす

薄暮烟

詠むれば遠山もともさひしきや

ねあし夕けの烟のみして

批評

●「法律思想を論ず」を讀む

七八年以前までは法律の研究非常に流行せしも其以後は漸く之を賤むる氣風を生じたり蓋し